

令和4年度 特色ある教育・経営の取組みを行う私立学校の事例集

教育DXで実現する考動人の育成

～学修者本位の教育の実現に向けて～

学校法人関西大学
関西大学

～関西大学～

関西大学千里山キャンパスは、阪急電鉄千里線・関大前駅で下車し、正門まで徒歩5分、緑あふれる千里山の丘陵地の一角にあります。同大学は、明治19（1886）年創立の関西法律学校を母体として、大正11（1922）年に大学令により、設立されました。



関西大学千里山キャンパス

建学の精神「正義を権力より護れ」の下、当時の総理事兼学長であった山岡順太郎氏が生涯貫いた精神「学の実化」を教育理念に掲げ、大阪府吹田市の千里山キャンパスを拠点に他6つのキャンパスにて教育・研究活動を行い、現在では13学部15研究科1別科を擁する

総合大学となっています。創設以来、考動力と革新力を備えた人材の育成に力を入れ、現在、学修者本位の教育の実現に向けて教育のDXを推進しています。

【DX推進構想 取り組みの経緯】

現在、日本の社会構造は、Society5.0などと呼ばれるIOTやビッグデータの活用など技術革新の大きな流れの中にあります。その中で提唱された、2021年6月の教育再生実行会議（第二次提言「ポストコロナ期における新たな学びの在り方について」）においては「データ駆動型教育への転換」が必要とされるなど、教育データの活用や対面授業とオンライン授業のハイブリッド化が急速に推進されてきました。

関西大学は2016年度に20年後を見据えた「Kandai Vision150」を策定しました。同ビジョンでは、「考動力」と「革新力」を備えた人材、「21世紀を生き抜く考動人」を育成することが掲げられ、そのような人材を育成するためには、知識を伝達する教育方法から学修者が主体的に学ぶ教育方法への転換と、大学が学生の能動的な学修を促進する場となるよう学修環境の充実が必要であるとの考えが示されています。

能動的学修環境を実現する方策の一つとしてのオンライン教育の取り組みは、2014年に遡ります。同大学では、海外との国際交流分野において、他大学に先駆けCOIL型学習（オンラインを活用した国際協働学習）という授業形態を導入しています。また、COIL型授業の他学部授業への横断的展開を見据えたオンライン教育の拡充やLMS（学習管理システム）を活用した予復習、e-Learningを用いた自学自習など授業内外での活動を全学的に浸透させるための土台として、2018年からBYOD（Bring Your Own Device）を推進し、学生一人ひとりがデバイスをもって学習できる環境を整えてきました。

このように、従前からICT教育を進めてきましたが、さらにDXを進展させるために、学長から「関西大学DX推進構想」が示されました。同構想をベースに策定した「関西大学DX推進計画」では、①学生の学修機会の制限・制約・バリアを軽減・除去する取り組み、②学修成果の可視化への取り組み、③DXの推進に対応したインフラ、環境整備への取り組み、④学内業務の効率化への取り組みを4つの柱として、これらを具現化するために5つのプロジェクトを設置しています。

同プロジェクトにおいて検討が重ねられる中、文部科学省から「デジタルを活用した大学・高等教育高度化プラン」

の公募がありました。これを機に同大学は、教育におけるDXをさらに加速させることを目的として、兼ねてから5つのプロジェクトにおいて検討していた構想を実現させることにしました。実現を後押ししたものととして、令和2年度から新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、対面での授業が制限される中、オンライン授業を余儀なくされたことがあります。また、海外とのオンライン教育にあたり、ICTを活用した国際教育のための環境づくりがコロナ禍前から課題としてありました。このような背景から従来培ってきたオンライン教育の経験を踏まえて、さらなる全学的なICTを通じた学習環境の整備を進めるため、「関西大学DX推進計画」を策定し申請しました。結果として、学びの質の向上と学修者本位の教育の実現に関する取り組み2つが採択されました。



DX構想

【関西大学グローバルスマートキャンパス構想】

同大学では、「関西大学DX推進計画」の柱の一つとして、いつでも、どこでも「だれとでも、共に学べる新たな教育環境の実現のためのGSC (Global Smart Classroom) を各キャンパスに設置しました。GSCには3つの特徴と効果があります。

- ・インクルーシブ・・・学生の特性を踏まえた授業の提供
- ・ポータルレス・・・場所や時間に制約されない授業の提供
- ・インタラクティブ・・・学生と教員が双方向的に活動する授業の提供

GSCにより、学生が自身の所属する学部に関係なく、所属キャンパス以外で開講される授業にも、バーチャルでありながら臨場感を失うことなく積極的に参加できる環境を実現しています。また、個別学習スペースSLS (Self Learning Space) を設置し、各学生の時間割において対面授業とオンライン授業が混在していても、大学内で両方の授業に対応できる環境を整備しています。

GSCは、オンラインで入ってくる学生の参加度合いや発言数をできるだけ一人一人把握できるように仕組みを実現したいという考えのもと、インタラクティブな学びをバーチャル空間でもなるべく実現できるように環境を指して開発されました。

現在、GSCを最も活用している科目が、COIL型科目となります。以前はオンライン画面上に表示される学生の反応が読み取り辛いことがありましたが、GSCを導入したことで学生の顔がパソコンではなくLEDの大きな画面に出てくるため臨場感が増し、実際の対面での授業に限りなく近い環境を実現しています。学生の授業への取り組みが定量化されるため、「誰が発言している、誰が発言していないのか」が分かり、教員へフィードバックされる機能も効果的です。

【LMSの強化】

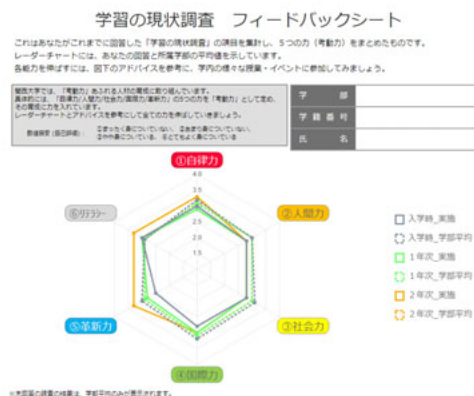
コロナ禍において学生の学びの成長把握をより良くするために、初年次から卒業時までの教育支援、キャリア支援をLMSに集約し、その機能を大幅に強化、連携させることによって、学生生活を総合的に支援することを目標としています。

教育支援では、クラウド型動画編集配信ソフトであるPanoptoを全学導入し、従来のオンライン教育で課題となっていた「データの大量保存や大人数での動画視聴が可能となりました。また、視聴履歴の解析により1つの動画の中で多くみられている箇所を特定し、わかりにくい箇所の特定や、試験結果と照らし合わせての授業改善、コンテンツの改修に繋げることによる学生支援が可能となり、オンラインでも学生が

学びやすい環境を実現しています。

キャリア支援では、キャリア支援システム(KICSS)の拡充とキャリア教育プログラム(関大版ハタチのトビラ)を開発したことにより、初年次から卒業に向けたキャリア教育を一貫して行うことが可能になり、さらにeポートフォリオと連結させることで在学中の取り組みや成果をいつでも振り返れる仕組みができました。このことにより、学生ごとの興味や関心に合わせた支援プログラムの実施や、関西大学の統合データベースと繋ぐことで自分の就職を希望通りに進めた学生がどのような履修・成績状況であったかということが分析でき、学生へフィードバックが可能になりました。

また、自らが主体的に考えて物事に取り組む「考動人」を育成するため、身に付けるべき5つの力を策定し、可視化しました。在学中に当該スキルが身につけているかを確認するために、教育学IRプロジェクトが学習の現状調査を主導し、分析を実施。結果は、各能力を伸ばすためのアドバイスと合わせて学生へフィードバックを行い、直接的に学生の学びに関与することで、特に履修に関する行動変容を促すことを目的としています。各能力は、リーダーチャート形式で学生へフィードバックを行い、学部平均との比較や自分自身の成長を自ら確認することができます。



教学IRプロジェクトによる可視化

【取材を終えて】

関西大学は、DXを活かした先進的な教育基盤の整備を進めています。2016年に20年後を見据えた教学改革のビジョンを描き、国際交流をはじめ、他大学に先立ち全学的にオンライン教育に取り組んできました。

今回のコロナ禍によるオンライン対応にもその経験を活かして早い段階から学習環境の整備に着手しています。本事業はDX自体が目的化されているのではなく、「Kandai Vision150」を実現するための手段としてDXの導入が有効であったという考え方が根本にあり、DXという新しい視点を取り入れつつ、元来有している学内機能を有効活用することで大学の発展に貢献していると感じました。

(取材) 私学経営情報センター